

久しぶりの県外研修で青森へ

あいづ と な み は ん
下北の**会津・斗南藩**旧跡探訪の報告
十和田市では岩手県とのゆかりを堪能



斗南藩士たちの墓に供花し合掌する当会の参加者

去る10月10日、11日の2日間、会員研修として青森県を訪ねてきました。当会の県外研修は平成29年7月の「小美玉・戸沢氏サミット」（茨城県）以来のことです。

女性会員4名を含めて15名の会員が参加しました。

1日目はむつ市。151年前の戊辰戦争に敗れ辛酸をなめた会津藩の移封先である「斗南藩」の末裔の方の案内で旧斗南藩士たちの悲哀が感じられる旧跡を訪ねました。

また、2日目は内陸部の十和田市の「新渡戸記念館」で花巻出身の新渡戸傳（つとら）親子の三本木原開拓の偉業を見聞、また盛岡市在住の馬事関連蒐集家であった故中村七三さんの寄贈品が展示されている馬の博物館「称徳館」を見学してきました。

二日間とも天候に恵まれたうえ、貸し切りバスも快適で有意義な研修となりました。



<メモ> 戊辰戦争に敗れた旧会津藩は、明治新政府側から「朝敵」の汚名を着せられ領地は没収となり御家断絶必至の状況にありました。しかし明治2年（1869年）11月3日に松平容保の嫡男・容大（かたはる・2歳半）に家名存続（お家再興）が許され、翌年の明治3年（1870年）1月5日に旧会津藩士4700名余が謹慎を解かれ、下北半島で「斗南（と な み）藩」として再出発することになりました。「斗南」は漢詩の「北斗以南皆帝州」（北斗星より南はみな天皇の治める州）からとったものといわれ（諸説あり）、当初は三戸藩といったのを改めたものでした。

移封された場所は、旧盛岡藩領の北郡（下北・上北の分かれる前の呼称）・三戸郡・二戸郡内に3万石を与えられました。

最初に訪れたのは「斗南藩士上陸の地」

今回の研修で我々が最初に訪れたのは、むつ市の大湊新町にある「斗南藩士上陸の地」。当時藩庁が置かれた「田名部（たなぶ）町」のむつ湾に臨む岸壁でした。今回の史跡案内をお願いした旧斗南藩士末裔の方方で組織する「会津斗南會」事務局長である坂部啓二さんは「ここには新潟港から新政府借り上げのアメリカ蒸気船ヤンシー号に乗り、日本海回りに海路をとつ



て移住してきた藩士とその家族の一団 1,800 名が明治 3 年 6 月 10 日に上陸しました。」と説明しました。会津から新潟までは徒歩だったと言います。「港に到着した会津の人々は、港から見える釜臥山を、会津の磐梯山と重ね合わせて故郷を偲んだと言われています。」とも話し、さらに「下北移住の経路を後世に伝えるために 30 年前の平成 2 (1990) 年に建てられた記念碑は、会津の鶴ヶ城の石垣と同じ物が使われ、会津若松市を望む方角に向けて設置されているんですよ。」と説明してくれました。

《下北への大移動…》 移封先が決まると藩では藩士たちが自由に落ち着き先を選択できるようにした。資料には会津残留 210 戸、農商になる者 500 戸、江戸などに分散する者 300 戸、北海道に行く者 200 戸、そして新領地には 2800 戸と記されている。

移封先の下北へは、太平洋側と日本海側の「海路組」と旧奥州街道を北上し、盛岡を通過して五戸、さらには大湊に向かった陸路組と三ルートに分かれた。

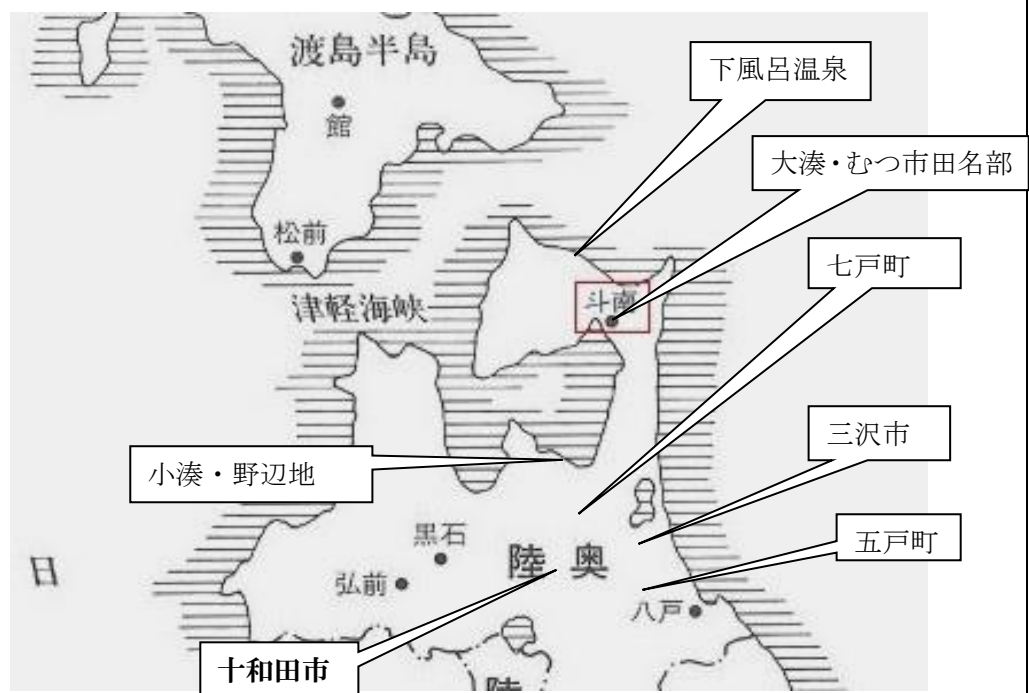
後に陸軍大将になる五郎少年は、一家とともに東京の捕虜収容所に収容されていたが、アメリカの蒸気船で 200 余名の藩士同行者と一緒に、5 月に汐留から一路、新天地をめざした。記録によると、慣れぬ船旅による猛烈な船酔いに苦しみつつも、五郎少年は無事 6 月に野辺地に到着した。

それに比して、会津に残留していた人々は悲惨の極みだった。約 600 キロの長途を老若男女が徒歩で移動したのであるが、十分な旅費さえ支給されなかった。前年が凶作だったことから、藩が用意した宿札では十分な待遇が得られなかったのである。移住の時期もバラバラで、秋に移動した者のなかには、みぞれや風雪に打たれて病死する者もあった。



新藩主の容大（かたはる）公 3 歳、家臣の胸に抱かれて八戸上陸

明治 3 年 4 月 18 日、下北に移住する者の第一陣として倉沢平治右衛門の指揮のもと 300 名が八戸に上陸した。藩主となった松平容大は、藩士の富田重光の懐に抱かれて駕籠に乗り、五戸に向かった。旧五戸代官所が最初の藩庁になり、後に現在の青森県むつ市田名部の円通寺に移った。



円通寺・徳玄寺

次に訪れたのは五戸から藩庁を移した「円通寺」とその近くの「徳玄寺」でした。

「円通寺」——案内役の会津斗南會の坂部さんは「藩庁となった円通寺は曹洞宗の寺院で『恐山菩提寺』の本坊。南部氏の援助で建てられたものです」と説明。なるほど山門、鐘楼など荘厳な雰囲気、古くから地域の信仰を集めてきた「古刹」との印象を抱きました。



「徳玄寺」——藩主松平容大公の食事や遊びの際に使用された場所です。ここでは、同寺住職の父で現在責任総代を務める石澤史（ふみと）氏が寺の由緒と斗南藩との関わりについて特別に講話。同氏は雫石町の歴史についても「インターネット情報ですが…」と前置きして詳しく述べてくれるなど大変好意的でした。同氏は斗南藩の系統ではありませんが「斗南會津會」の特別顧問を務めており斗南藩の歴史伝承に一役買っている方です。氏は先代住職から聞いたという3歳の藩主容大公の様子を語り、最後に容大公が使ったとされる扇などを見せてくれました。

斗南藩史跡

次に坂部さんが案内してくれたのは藩士が復興を夢見て開拓の鍬を入れた丘陵地の斗南藩史跡地。今は辛うじて残る土堀跡のみがその当時を伝えていました。

坂部さんは「ここを未来の藩の拠点とすべく一戸建て約30棟・二戸建て約80棟の小屋を建てて1番町から6番町の市街地を造成し200戸の移住者を入植させました。陸稲・粟・稗・蕎麦・馬鈴薯・甘藷イモ・大豆・小麦・小豆・煙草・茶・藍などに加え、蜜柑の類まで栽培し、水田稲作まで挑戦した。他産への取り組みも怠らず、養蚕のため桑を植栽し、杉苗・雑木なども植え林業にも着手したのです。さらに会津の名産であった漆器細工に加え、鋳物の鋳造、瓦・煉瓦の製造、製紙、機織、畳造りなどの手工業も推進しました。しかし、先住の農民ですら見捨てた過酷な土地にヤマセも加わり、あまりにも痩せた土地からの収穫は皆無に近く、努力はすぐに水泡に帰し夢は潰えました。」とご先祖たちの無念さを語り、聞いている我々も同情の念を禁じえませんでした。



「なお勉学怠らず」…会津藩の藩校「日新館」が知られているが、移封直後から徳玄寺本堂ではその日新館で行われた教育も復活させている。ただし、従来の孝経や論語にかわり、福沢諭吉の『世界国尽』『西洋事情』『窮理図解』など、時代に即応した書物が講じられたという。さすがである。これが下北に残った旧藩士の後の人生に影響している。

【現地研修のまとめ】

斗南藩の終焉は突然にやってきた！

明治3年6月の田名部上陸からわずか1年足らずの明治4年7月、突然「廃藩置県」が断行された。揶揄するつもりはないが、まさに青森県産米特A銘柄と同じ「青天の霹靂」であった。また、その直前に斗南藩の重臣らによって同藩と弘前藩との合併が成立、次いで藩庁が弘前から青森へと移り「青森県」の誕生となった。この間「盛岡藩」は「つんぼ棧敷」だった。

この廃藩置県は斗南藩士とその家族に大きな動揺をもたらした。旧藩主は上京を命ぜられ、人心は「殿様」から離され、藩からの「御給金」も無くなったのである。「もう斗南にとどまる理由はない」とばかりに移住者たちの会津への帰還、全国への離散が相次いだ。過酷な自然環境を原因にする人もいるが、これが「斗南藩消滅」の真の原因であると言ってもいいのではないかと。

しかし、決して多くはなかったが下北の地に踏みとどまった人々もいた。藩の大参事だった廣澤安任らが三沢に日本初の民間洋式牧場を開設したほか、入植先の戸長・町村長・吏員・教員となった者が多く、その中からは、北村正哉（元青森県知事）をはじめ郡長・県会議員・町村長や青森県内の各学校長などが出ている。青森県発展の一翼を担ったのは、まさに会津、そして斗南出身の彼等だと言っても過言ではないだろう。

最後に一言。「下北半島の田名部」はかつて盛岡藩の流刑地だったこともあり、暗いイメージがあった。しかし現地を見て、実は「森林・海運・漁業・恐山」を擁する恵まれた土地だったので、との感を抱いて帰ってきた。斗南藩以前の下北、つまり盛岡領北郡の歴史を調べてみたい。

「南部氏」への思いを新たにした旅に満足！

天正18（1590）年、秀吉の朱印状では南部氏の領地は「七郡の事」で拝領となり、八戸根城より奥は「北郡」としていた。また、中世のこの地を歴史学者は「北奥（ほくおう）」とも呼んでいる。

今回その地を訪ねる機会を戴いた。南部氏の旧領田名部と十和田三本木で〈読む〉より〈見る・聴く〉の方が脳裏に残るということを実感した二日間の旅だった。

【1日目】

南部盛岡藩雑書の元文（げんぶん）4（1739）年の条に八代藩主利視がお忍びで「田名部の下風呂温泉」へ湯治に行ったとある。8月21日に盛岡城を出駕、9月22日に帰城している。我々は当地の祭りの山車を楽しんで一泊で帰ってきたのに、なんと32日間の長旅である。また、元文元（1736）年8月12日の条によれば、家臣が許可を得て下風呂へ湯治に行ったが相応だったので一廻りの追加願いを出し許可されている。「一廻り」とは七日間の意味である。（※相応…快適だった。「身分に合せて」の意味か）

当時の参勤（交代）の例では盛岡～江戸の行程日数が14～15日ぐらいと言われている。今回の研修はかなり遠距離のイメージで出かけたが、旅は一人より二人、二人より会員大勢で少し“はめ”を外した道中も楽しいものだったと思った。

【2日目】

十和田馬事公苑の施設や展示物のすばらしさには驚いた。展



示物の多くが本県から移出した由緒あるものだと聞かされた。宝物をみすみす失った当時の岩手県や盛岡市の対応はどうしたものか？

卑弥呼の時代の文書に「日本に馬はいない」と書いてあったという。初めて馬が日本にやってきたのは、今の山梨県周辺に渡来人が「トカラ馬」を持ち込んだのが始まりだともいう。山梨（甲斐の国）は南部氏の出自目で「南部馬」の元祖の地でもある。南部馬は改良に改良を重ね北海道では道産子（どさんこ）に改良され、「ナンバ歩き」の馬と

【最後の南部馬のはく製】 して開拓に貢献したということも今回初めて知った。

【終わりに】

十和田の「称徳館」の素晴らしさに感動し「南部」へ思いが一層強くなった。やはり我々岩手県人は南部氏の出自目の「旧甲斐の国巨摩（こま）郡南部郷」にぜひ行ってみたいものである。「名物に旨いもの無し、旅の恥はかき捨て」の言葉の如く、会員大勢でワイワイ騒ぎながら、少しは“はめ”を外し、ご当地の旨いものを食べ「プチ勉強」もしながら行く旅もいいものだと思う。史談会の会員増にも大いにつながると思う。最後に今回の研修の企画運営に大変ご苦勞を戴いた幹事さんに感謝申し上げます。

下風呂温泉のお祭りは感動的でした！

会員 中野 昭子

まさにくらいも若きも…の祭りの活気でした。夕方まではひっそりとした海辺の寒村に見えた下風呂の温泉街。ホテルでの夕食後、通りに出てみると商店街に色とりどりの提灯で飾られた大きな山車がそそり立ち、それを取り巻く若者たちの威勢のいい掛け声が通りに響いていました。沿道に注連縄が張られ、商店街の店先には神様への立派な御供えが飾られて人々の信仰の篤さを示していました。かつては普通にあった素朴な祭り風景だったかもしれませんが、雫石をはじめ今ではあまり見られない雰囲気でした。津軽海峡に面したこの下風呂地区は漁師町。「板子一枚、下は…」という過酷な仕事の漁師の人たちならではの篤い信仰心に深い感動を覚えた一夜でした。



下風呂温泉「若宮稻荷神社例祭」は青森県無形民俗文化財に指定されている伝統行事。かつては南部公も見つたかもしれない。雫石では見られない“祭りの活気”が溢れていた。